



## 手紙が伝える「心」

**寝**

つきが悪くなり、就寝前に1時間ほど読書をすることが日課となった。近頃は小説を読む体力と気力が衰え、エッセイや旅行記などを読むことが多かったが、久しぶりに小説に心ひかれ『ツバキ文具店』(小川糸著・幻冬舎文庫)を手にした。

主人公は、鎌倉で文具店を営みながら、代書屋をしている女主人。江戸時代には右筆(ゆうひつ)と呼ばれた職業で、お殿様に代わって代筆を行っていたが、現代では依頼主の要望にそって年賀状やお悔やみ・お詫び状、手紙などを書くのが主な業務である。

お悔やみ状は、文字の色を薄くすることは知っていたが、「悲しみのあまり硯に涙が落ちて薄まったため」との意味合いは知らなかった。さらに、通常、フォーマルな手紙は二枚重ねになっている封筒を使用するが、弔辞の場合に限っては、不幸が二度重ならないよう、封筒はあえて一重のものを使うとのこと。

様々な依頼に心を込めて、筆記用具(毛筆・万年筆・ガラスペンなど)やインクの色、便せんの紙質、縦書きや横書きか、切手の絵柄……などなどを選択する。

封筒の表が顔だとすると、切手は顔の印象を決める口紅のようなもの。

口紅が失敗してしまうと、顔そのもの

の印象が台無しになってしまう。たかが切手、されど切手。切手選びは、手紙を送る人のセンスの見せどころとされている。

切手にまでこだわるとは。まさに、日本人の相手を思いやる心遣いの奥深さに脱帽。

また、手紙に最初に書く言葉は「拝啓には敬具。謹啓には敬白でしめる」が、なぜと疑問を持つことなく知識として知っているだけではつまらない。悪字を理由に筆不精を決め込んでいた私であるが、久しぶりに幼馴染に手紙を書こうと思う。その後は、女性らしい締め言葉「かしこ」で結ぼう。

代書屋の姿を通して、日本の心、まさに鈴木代表が常常おっしゃっていた「日本の美風」に触れることができた。



文：山橋由貴子 [やまはしゅきこ] (公社)「小さな親切」運動本部専務理事兼事務局長 イラスト：安彦麻理絵 [あひこまりえ]

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 「SDGs」で未来へ親切

### 料理初心者こそ! 「蒸籠」のススメ

蒸籠の素材は、檜、竹、杉の3種類。私が購入した竹素材は、お値段が手頃で丈夫なため、初心者向きと言われています。また竹は、たつた3年で成木となり化学肥料や農薬を使わず栽培できるほか、2酸化炭素を吸収してくれる「サステナブルな素材」として近年注目を集め、プラスチックに代わり竹製品を活用することも、SDGsの貢献に繋がります。

蒸し料理は食材の栄養分が逃げにくく、油を使わないでのヘルシー。特に、野菜は甘みが残り格別のおいしさです。さらに、食材を切って並べただけなのに、とても映える! と大変気に入りました。長く大切に愛用していきたいです。

最近買って良かつたものNo.1は、ズバリ「蒸籠」。料理上級者が使うイメージがあり、これまで手を出せずにいたのですが、思い切って購入したところこれがすこぶる便利でした。火通りにくい根菜類やイモ類も、10分ほどでホクホクになる上、いっしょに肉や魚を入れて蒸してしまえば、あつという間にバランスの取れた皿が完成します。

